

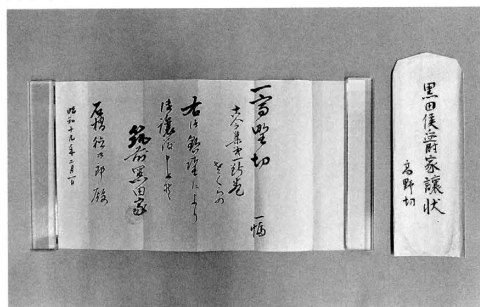
《古今和歌集卷一断簡 高野切》付随資料の紹介

平間理香

2014年10月11日から2015年1月12日にかけて「ちょっと気になる 絵の履歴」と題したコレクション展示を開催した。企画は、それぞれの作品がどのように誰の手を経て伝わってきたかを紹介することで、作品がその時々になされた状況を想像し、楽しんでもらおうという趣旨のものであった。その概要と展示作品については、本誌「展覧会」の項に記録するが、会場では各作品の伝来を裏付け、あるいは推測の典拠とする資料も紹介しており、ここに一作品ではあるが、その資料を整理しておく。今回の展覧会でメインに取り上げた平安時代の書讀《古今和歌集卷一断簡 高野切》（以下、《高野切》）について。

《高野切》を収める箱には、8種の紙資料がコンパクトに折り畳んで収められていた。発行主が分かるもの分からないもの、年記のあるもの無いものがあるが、内容から判断して古いと思われるものから順に挙げていく。

資料1)



一高野切 一幅
古今集第一號卷
さくら

右御懇望により
御譲渡申上候

筑前黒田家 * 藤巴紋の家紋あり

石橋徳次郎殿

昭和十九年二月一日

(封筒)

黒田侯爵家讓状
高野切

旧福岡藩主の黒田家から石橋徳次郎に宛てられた讓渡状。1944（昭和19）年2月1日付。この時の黒田家当主は、鳥類学者で貴族院議員の侯爵・黒田長禮（1889-1978）で、14代目にあたる。石橋徳次郎（1886-1958）は、日本ゴム株式会社（現・アサヒコーポレーション）社長で、石橋正二郎（1889-1976）の兄。この讓渡状により、黒田家から石橋徳次郎へと《高野切》が渡ったことが分かる。なお、封筒の筆跡は書状とは別のもので、後から添えられたものであろう。

資料2)



謹啓

立春猶烈寒相覚候
折柄益御勇剛の仕儀奉
恭賀候陳者此度侯爵家
御宝物之件に就ては不一方
御高配を辱ふし格別の
御尽力を賜り候段全く
容易ならざる御尊慮
に依り候御陰と感銘奉
伏謝候同家に於かせられ
ても侯爵様始め御要職
にも非常なる御満足御坐
候て御悦の趣團男爵様
より深く感激す御様子
を伝承仕り候次第委曲
岡氏御報答を以て御入手
奉拝察候何分時局柄書中
にて遠慮も有之難尽候へ共
誠に此度儀只々厚き
思召難尽 不肖共等に於ても
感荷大悦不過之且猶
幾久敷御慶此之と

奉存候何れ拝謁之栄を
賜候て深々萬感万謝申
述ぶる不敢取此度筆紙
に尽くし不得候とも偏るに
感佩の心中を申しのぶべく
御礼如斯御坐候
段□
尚々永坂家様より夫々殊に
御心付を拝受仕難尽御礼
申し上候 再拝

二月五日

春海調古堂
小田栄作拝

石橋御本家様
侍曹

(封筒)

表：久留米市篠山町

石橋徳次郎様

裏：緘

東京市赤坂区青山高樹町六番地

春海商店出張所

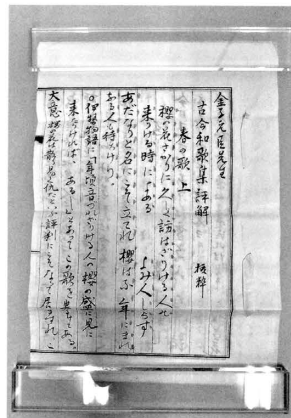
電話青山 (36) 壱〇〇八番

小田栄作

昭和十九年二月五日

春海商会小田栄作から石橋徳次郎に宛てられた書状で、1944（昭和19）年2月5日付。先の資料1)の4日後に出されたもので、《高野切》を徳次郎が引き取ったことに対するお礼が綴られている。小田栄作は大阪の古美術商で、書中に「侯爵様（黒田長禮）」と「御要職」が満足していることを「團男爵様（團伊能・1892-1973）」から聞いたと書かれており、《高野切》の具体的なやり取りをおこなったのは小田と考えられる。團は、父の琢磨が福岡藩士の生まれで、12代藩主・長知が岩倉使節団に同行する際、随行員となるなど、黒田家とは深い関係にあった。なお、書中末尾にある「永坂家様」は、石橋正二郎のことか。同じ時期に、黒田家から正二郎のもとに雪舟《四季山水図》が譲渡されている。¹⁾

資料3)



金子元臣先生

古今和歌集評解 抜粹

春の歌 上

櫻の花さかりに久しく訪はざりける人の
来りける時によめる よみ人しらす
あだなりと名にこそ立てれ櫻ばな年にまれ
なる人も待ちけり。

○伊勢物語に「年頃音づれざりける人の櫻
の盛に見に来たりければ、あるし」とあつ
てこの歌を挙げてある。

大意 櫻の花は散り易く仇たといふ評判に
こそなつて居ますれ この様は、どうして
仇ところかかやうに一年の内にもたまさか
てなくては、お出にならない水臭い人をさ
へも散らすに待つて居ますわい。

評 前に仇なりといふ評判のたった事か
あつて男の中絶をした女だろふ。けれども
それは冤名で今に外心もなく獨居して居た
ので自分の貞操を桜に託して誇つて居る。

返し 業平朝臣

今日来すはあすは雪ともふりなまし消
えすはありとも花と見ましや

大意 私か今日尋ねて来たれはこそこの桜
を花とは見ますれ 若し今日来ぬならば明
日はもう雪のやうに散ってしまひませうわ。
それもまことの雪でないから假令消えすに
あるとしてももとの花とは見えませうか否
雪より外は見えはしますまい。

評 花は固より評判の仇者で散つて雪とな
らぬうちに訪ねて来た私かえらい親切なの
さといふ餘意を含めてある

題しらず よみ人しらず
ちりぬれば慈ふれとしるしなき物を今日こそ
桜折らは折りてめ
大意 散りはててからは如何に見たく思ってもその詮もないもののを、今までは惜しくて折らなかつたが、かう散そうでは早く今日の内にこそ、この桜は思い切って折るなら折ろうわさ。

評 折って花瓶になりとも挿して大事に長く賞翫しようの心構えと見られる。

○
折りとははをしげにもあるか桜花いざ宿かりて散るまでは見む

大意 この桜の花はあまり見事で見捨てては帰りにくいから一枝折って行かうと思ふか折りとうらばいかにも勿體なさそうにまあ見える事よ。それよりはこの邊に宿を借りてこの花の散るまでは是非に見て居よう。

評 一度は折り取らうと試みたが、あまり見事なので散るまでは宿かりて見ようと思ひ直したのに花を愛する情の深さが見える。紀のありとも

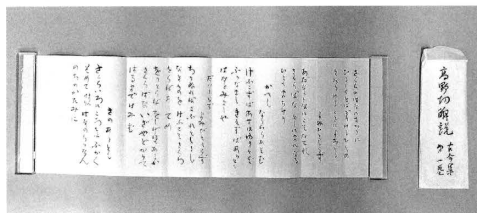
桜色にころもは深く染めてきむはなの散りなむ後のかたみに。

大意 まことの花でなくとも着物は今から桜色によろしく染めて着ようと思ふ。それは追付け花か散ってしまうであらう、その後の形見にさ。

評 せめて花の色に似た着物を着て慰ようといふ。全く櫻の執着者の言である。

国文学者であり、歌人の金子元臣（1869-1944）が1901（明治34）年から1908（明治41）年にかけて著した『古今和歌集評釈』の中から、本作品に該当する箇所を抜粋し、書き写したもの。

資料4)



さくらははなのさかりに
ひさしくとはざりけるひとの

きたりけるときによみける
よみひとしらず
あだなりとなにこそたてれ
さくらばなとしにまれなる
ひとまちけり
かへし

なりひらあそむ
けふこずばあすはゆきとぞ
ふりなましきえずはありとも
はなとみましや

だいしらず
よみひとしらず
ちりぬればこふれとしるし
なきものをけふこそさくら
をらばをりてめ
をりとははをしげにもあるか
さくらばないざやどかりて
はるまではみむ

きのありとも
さくらいろにころもはふかく
そめてきん

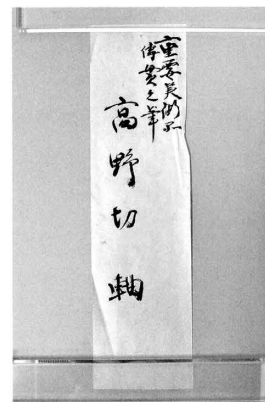
けり はなのちりなん
のちのかたみに

(封筒)

高野切解説 古今集
第一巻

《高野切》の内容を書き起こしたもの。同様の書き起こしが、当館所蔵《伊勢集断簡 石山切》3幅や、豊臣秀吉《書翰》などにも付随している。

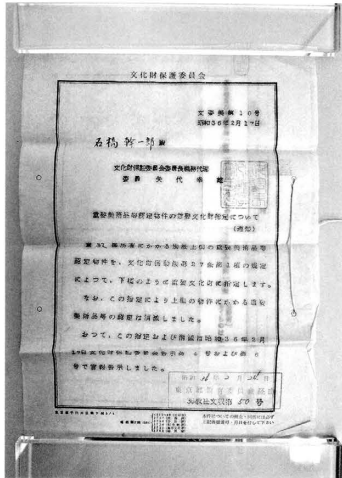
資料5)



重要美術品
傳貫之筆
高野切 軸

何かの札として使われたものか。

資料6)



文委美第10号
昭和36年2月17日

石橋幹一郎殿

文化財保護委員会委員長職務代理
委員 矢代幸雄 *朱文方印あり

重要美術品等認定物件の重要文化財指定に
ついて (通知)

貴殿御所有にかかる別紙上欄の重要美術
品等認定物件を、文化財保護法第27条第1
項の規程によって、下欄のように重要文化
財に指定します。

なお、この指定により上欄の物件にかか
る重要美術品等の認定は消滅しました。

おって、この指定および消滅は昭和36年
2月17日文化財保護委員会告示第4号および
第6号で官報告示しました。

昭和36年2月24日
東京都教育委員会経由
36教社文収第50号

上欄名称

紙本墨書古今集卷第一断簡 (高野切) (さ
くらの)

下欄名称

古今和歌集卷第一断簡 (高野切) (さくら
のはな)

員数

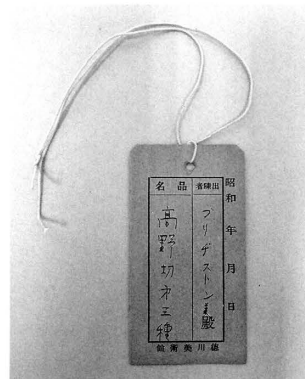
一幅

東京都 石橋幹一郎

*1枚目上辺、および1枚目と2枚目の継ぎ目に割り
印あり

1961 (昭和36) 年2月17日に発行された重要美術
品等認定物件の重要文化財指定についての通知書。
発行者は、文化財保護委員会委員長職務代理をつ
とめた矢代幸雄 (1890-1975) で、通知を受けた
のは、石橋幹一郎 (1920-1997)。幹一郎は、正二
郎の長男で、徳次郎の甥にあたる。この時すでに、
《高野切》の所蔵が徳次郎から幹一郎に移ってい
たことがうかがえる。この通知を受け、同年6月14
日に指定書が公布された。

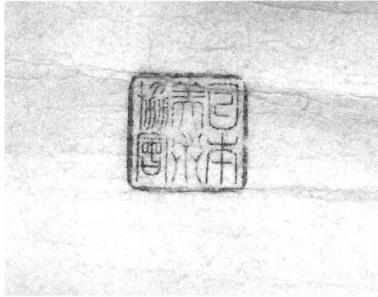
資料7)



昭和 年 月 日
出陳者 プリヂェストン美殿
品名 高野切第三種
徳川美術館

1965 (昭和40) 年に徳川美術館で開催された「仮
名の美展」に《高野切》は出品されており、その
時の札であろう。気になるのは、「第三種」に分
類されているところで、当館の《高野切》は巻一
に当たり、第一種に分類されるのが通説となっ
ている。

資料8)



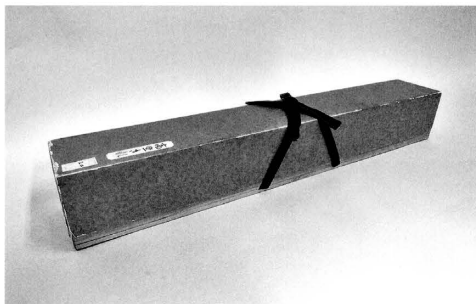
「日本／美術／協会」(朱文方印)

旧巻留紙に使われていたと思われる紙片で、日本美術協会の印を捺す。いつ、どのように日本美術協会と関わったのかは不明。まったくの憶測であるが、1950(昭和25)年から1961年頃まで、先の資料2)に出てきた團伊能が日本美術協会の会頭に就いており、その繋がりか。

以上の資料より、来歴については1944(昭和19)年2月1日に福岡藩主の黒田家から石橋徳次郎に渡り、1961(昭和36)年以前に徳次郎から石橋幹一郎の手を経たことが分かる。財団の所蔵となったのは、1998(平成10)年で、幹一郎の没後に遺族から寄贈された。

ところで、《高野切》は虫食い跡の顕在化、経年による劣化が進んでいたことから、2004年3月から翌年3月にかけて全面的な解体修理をおこなった。これより、太巻での収納保管と改め、収納箱も新調した。これまで作品を収めていた箱は、今後目に触れることも少なくなるであろうので、あわせて書き留めておく。

外箱)



桐屋郎箱紐付

蓋側面墨書：高野切

さくらの歌

石橋家所蔵

唐草文紙製蓋覆に貼紙4種：

イ) 高野きれ

ロ) 改二類

第三號

ハ) 幹

日 K.I.

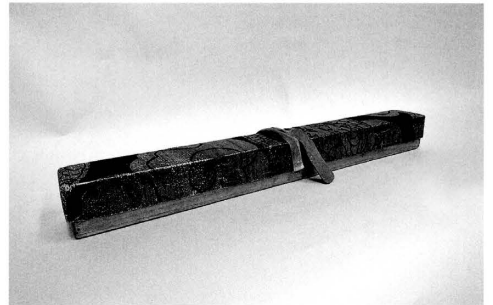
31

古今和歌集断簡

高野切「さくらのほな」

ニ) 作品の写真

内箱)



桐屋郎箱皮紐付

蓋表墨書：歌き連 貫之筆

♪ 貼紙2種：イ) 世襲財産附属物第 弼

ロ) 第一家賣

種類 掛

番號 三

*合の朱文円印あり

身側面貼紙：歌きれ

貫之筆

♪ 朱書：-3

雲龍文銀欄製蓋覆

外箱の側面に貼られた貼紙ハ)は、石橋幹一郎が所蔵する作品に付けられる管理ラベル。ロ)の貼紙は、ほかの石橋徳次郎旧蔵品にも見受けられるもので、おそらく徳次郎の管理ラベルではないだろうか。また、内箱に貼られたイ)とロ)は、当館が所蔵し黒田家より伝わった雪舟《四季山水図》や、出光美術館が所蔵し同じく黒田家伝来の《高野切》を収める箱にも見られる札で、黒田家の作品管理ラベルと考えられる。いずれも、上述

してきた資料と合わせ《高野切》の伝来を裏付けるところとなる。

当館所蔵の《高野切》に付随する資料以外でも、伝来について、いつ頃黒田家に伝わったのか、黒田家以前はどこに在ったのか、等について考察しうる資料は今のところ確認できていない。継続して調査をおこなっていきたい。

註

- 1) 拙稿「作品解説（雪舟四季山水図）」『雪舟等楊——「雪舟への旅」展研究図録』163,164頁、「雪舟への旅」展実行委員会事務局・山口県立美術館、2006年